

2020年6月21日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「心のしなやかさ」ヨハネによる福音書7章37～39節

主任牧師 加藤 誠

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」(ヨハネ7・37-38)。

ユヴァル・ノア・ハラリというイスラエルの歴史学者がいます。非力な動物である人類(サピエンス)がなぜ地球上でこれだけ大きな力を持つようになったのかを考証した『サピエンス全史』で名を知られるようになった学者です。

「この十年間に生まれた子どもたちに、どんなアドヴァイスをしますか」という問いに、ハラリはこう応えています。

「昔の人たちが、人生の中で経験する社会の変化はとてもゆっくりしたものでした。子どもの時に見た祖父母の姿と自分が年老いた時の姿をそのまま重ねることができたので、祖父母が語る知恵は孫たちにとっても大切なものでした。ところが今や社会の変化のスピードはジェット機のように早くなり、祖父母たちの知恵は力を失いました。二十年後に世界がどう変わり雇用がどうなっているかを、子どもたちに教えることは誰にもできません。今、学校で学んでいることは二十年後には通用しないでしょう。では、どうしたらよいのか。わたしにできる助言は『精神の健康と豊かな感情を育ててください』ということです。変化するスピードがますます速くなる二一世紀において確かなことは、私たちは五十代になっても六十代になっても常に新しく変わり続ける、自己変革を求められます。私たちは五十歳をすぎると自らの思考や生活スタイルを変えることにストレスを感じおっくうになりますが、二一世紀には心のバランスとレジリエンス(しなやかさ)がとても大切になるのです」と。

若者たちに「精神の健康と豊かな感情を育ててください」というハラリの助言はちょっと意外に思いました。当たり前のごく基本的なことに思えたからです。けれども、どんなに社会が劇的に変化しても、人が生きる上で大切なことは変わらないということなのでしょう。

ここで「豊かな感情を育む」とはどういうことでしょうか。笑う時は笑い、怒る時は怒り、喜ぶ時はおおいに喜び、悲しむ時にはしっかり悲しむ。考えてみると、これらは「独り」ではできないことです。誰かと一緒にいて、私たちはお腹を抱えて笑い、「これはおかしい!」と怒り、抱き合って喜び、肩を並べて悲しむことができるのではないのでしょうか。だとすると、「豊かな感情を育む」とは「誰かの命とつながる」ということと不可分なことなのでしょう。「独り」で部屋の中にこもり、小さなコンピューターが支配する世界の中に埋没していたのでは「豊かな感情を育む」ことはできないのです。

また「精神の健康を育む」とはどういうことでしょうか。わたしは「大きな精神・大きな知恵につながり、豊かに耕される」ことではないかとイメージします。たとえば「大きな精神」とは、わたしの人生に意味を与えてくれるものです。なぜ生きるのか、なぜこの仕事をするのか。わたしが自己満足に埋没するのではなく、わた

しの精神を高く引き上げて、世界や隣人につなげてくれる「力」です。

イエス・キリストという方は、ある意味で異端児でした。型にはまらない、自由人でした。当時の宗教者たちは皆、「聖書」（私たちが手にしている旧約聖書）をすべて暗唱するくらいに一生懸命に学びましたが、それらは「文字づら」の学びにすぎませんでした。彼らの「信仰」は、五百年も以上前に書かれたことをそのまま再現して守ることでしかなかったのです。それに対して、主イエスは、聖書の本質は「愛」であると喝破し、祈りにおいて「愛なる神」とつながり、「神と共に生きる」関係を体現されたのでした。

今朝、ご一緒に開いたヨハネによる福音書7章は、ユダヤ教の人たちが大切にしていた「仮庵祭（かりいおさい）」で主イエスが語られた言葉です。「仮庵祭」とは、かつてイスラエルの民がエジプトを脱出して荒野を旅した際、「水が飲めない！」と不平不満をモーセにぶつけた時に、神の命令に従ってモーセが手にしていた杖で岩を打ったところ、岩から清水が湧き出て人々は渴きを潤すことができた…という故事を再現したお祭りです。しかし実際に岩を杖で打って清水を出すことなどできないので、井戸から汲んできた水をエルサレム神殿の祭壇にかけて、その水が地面に流れ出す様子を見て、みんなで喜び祝ったのでした。

しかし、主イエスはそのように昔の故事を模した祭りではなく、ほんとうに私たちの心の渴きを潤し、私たちに生きる力を与える、「聖霊」という生きた水が、イエスとのつながりを通して、私たち一人一人に確かに与えられることを教えてくださいました。

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は…その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」。(ヨハネ7・37-38)

「生きた水」。これは旧約聖書のエゼキエル書47章にある表現で、「濁った死んだ水」と対比される言葉です。「濁った死んだ水」は魚を殺してしまう。それに対して「生きた水」は魚たちに命を与えます。「生きた水」は、私たち自身の内側からは湧き起こりません。私たちの内側から噴き出てくるのは、他者の命をおとしめたり、傷つけたりするものではないでしょうか。私たちがイエス・キリストにつながり、主イエスから受ける「聖霊」によってのみ、初めて私たちは隣人に励ましを与えたり、慰めを運ぶことができし、私たち自身が「聖霊」の癒しと慰めにあずかることを通して心のレジリエンス（しなやかさ）をいただいでいくことができるのです。

現代の私たちはみんな、手の中にある小さなコンピューターを通して、実に多くの情報を得ていますが、しかしその情報の洪水に支配されて、心のレジリエンス（しなやかさ）を失い、隣人に対しても、神に対しても、すっかり固くひからびた状態になってしまっていないでしょうか。将来を生きる若者たちだけでなく、今を生きる私たちこそ、イエス・キリストから湧き出る生きた水を必要としているのではないか。そう考えさせられるのです。

「しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へと招いてくださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことのないようにしてくださいませ」。(第一ペトロ5・10)